

彼女は医師 4 年目で当科に配属となりました。大学病院で 2 年間の初期臨床研修を終え、3 年目も大学病院に残って Subspecialty 領域の専門研修を開始しました。ところが 3 年目に体調を崩してしまい、長期離脱を余儀なくされました。2024 年 3 月主任部長が初めて彼女に会った時は、それはそれはもう… “不安のかたまり” になっていらして、涙なくしてはお話ができないありさまでした。

通常の専攻医さんは 3 年目に、数名からなる主治医団の末席として、雑用をしながら先輩と常に行動を共にし、専門的治療のやり方を見て学びます。つまり 3 年目の専攻医さんは、主治医を務めることはありません。あくまで副主治医として 1 年間過ごし、自らの責任で治療方針を決定する機会はありません。彼女は、その「見て学ぶ」1 年間をすっ飛ばして、自らが主治医として患者さんの治療方針を決定する 4 年目の医師になってしまったのです。しかも、ひっきりなしに重症の患者さんが運び込まれてくる北河内最前線の市民病院で！

それは可哀そう、4 年目だけれど 3 年目扱いにしてあげれば？ というご意見もあるかと思います。主任部長だって、そうしようかな？ と一瞬迷いました。でもここは市立ひらかた病院です。ただでさえ医師は不足しており、主任部長もナンバー2 の部長も毎日必死で自分達の業務をこなしています。そして何より、もう一人の 4 年目専攻医さんに負担がかかりすぎる事だけは、避けなければならないという気持ちが強くありました。

「みんな全力でフォローするけれど、仕事の負担は様子を見て配慮するけれど、あなたを4年目の専攻医さんとして扱います。」

そうは言ったものの、“この子どうなるんやろう…なんとか一年辞めずに持つてくれ…”とそれだけを願っていました。しかし彼女の、“ここでくじけたらもう後はない”という悲壮感すら漂う決意が、彼女をひらかたに踏みとどまらせました。その上、周囲の予想をはるかに上回る大躍進すら遂げたのです。もともと心優しく明るい彼女です。あっという間に周囲の先輩・後輩そして同期と仲良くなりました。積極的に他科の先生に声をかけ、分からないことを教えて貰っていました。そして主治医として治療方針を決定し、ご家族に病状を説明し、責任を持って笑顔で患者さんを担当することができました。

主任部長、“彼女に学会発表をさせるのは望み過ぎやな…”と思っていたのですが、「やります、やりたいです。」との彼女の発言に、日本内科学会近畿地方会での口演を指導しました。彼女にとって人生初の学会発表です。案の定、気が遠くなりそうな（=ひどい）スライドを持ってきましたが、辛抱して説明し、すべてのスライドに修正指示を出しました。主任部長、不安になり彼女に聞きました。

「私が修正しなさいって言ったとこ、全部理解できた？」「ハイ!!」「…本当に全部わかってる？ほとんど全部直さなあかんねんで？」「ハイ!!」やっぱり不安になり、そっと医局の専攻医さんゾーンに彼女を見に行くと、なんと仲良しの循環

器内科の先輩(ヨーロッパ心臓病学会が主催する European Society of Cardiology Congress 2024 で学会発表しちゃうくらいの実力者)に手取足取りスライドを直してもらっているのではないですか!!「あの子、当てがあったんやな。」その後、びっくりするほど質の高いスライドが出来上がってきたことは言うまでもありません(笑)。

2025年3月、彼女は更なる Subspeciality 領域の専門研修のために移動となりました。彼女の次の配属先は、なんと私の大学院時代の先輩が主任部長を務めておられる病院で、ご縁ってあるものですね…本当いい所で良かったと一安心しました。主任部長、もう何も心配していません。今後のご活躍を心よりお祈りしております。そしていつの日か、市立ひらかた病院に帰ってきて下さいね!



枚方市内のカジュアル・フレンチレストランにてサプライズのメッセージ付きデザートです。

主任部長、枚方市の経済にも貢献します!

